

第1部 『中南米音楽』の時代(2)

おはなし：中西 環江 (聞き手：高場 将美)

『中南米音楽』は、1952(昭和27)年5月に、中南米音楽研究会 Sociedad del Estudio de la Música Iberoamericana——通称「セミ S.E.M.I」——の機関誌として創刊されました。これを、会員のサークルを超えた雑誌にしたのが中西義郎(なかにし・よしお)さんです。

中南米音楽研究会から独立した雑誌(つねに密接な関係を保っていました)『中南米音楽』は、中西さんの熱意と努力で資金難や記事ネタ不足などの問題を乗り越え、1960年代前半には、マイナーな分野の専門誌ではありますが、世間に認められるまともな月刊誌になりました。現在の『ラティーナ』誌は、この直接の延長線上にあります。

いっぽうで中西さんは、1964年に、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京(歌手：藤沢嵐子、阿保郁夫、柚木秀子)のアルゼンチン公演の協力・随行者となりました。

そして、アルゼンチン・タンゴ楽団の日本公演の、招聘元との橋渡しの仕事もはじめました。1965年に、労音のネットワークで、オスバルド・プグリエーセ楽団の全国公演を実現しました。8月末から12月末までの大ツアーでした。1970年のホセ・バッソ楽団で、「民音タンゴ・シリーズ」をスタートさせました。メキシコのロス・トレス・ディアマンテスの初来日にも協力、フォルクローレの巨匠アタウワルパ・ユパンキの後期の公演も実現しました。

また1960年代からアルゼンチンのLPレコードの輸入(とても少数)。本格化できたのは後年ですがアルゼンチン以外からもCDや民俗楽器・出版物などの輸入販売をしてきました。

中西義郎さんは1992年にブエノスアイレスで仕事を終えて日本に帰る空で、この世を去られました。

中西環江(なかにし・たまえ)さんは、その奥さんで、すべての実務に、ときには義郎さん以上にたずさわってきた方です。苦労も、もしかしたら義郎さん以上にしていると思いますが、本日は、いやなことは忘れて(公表できないことも多々あるでしょうし)、思いだすままに、たのしくお話をさせていただきます。(高場・記)



- 上写真
中西環江さん(1964年夏)
- 左写真
ブエノスアイレスの国立団体 CASA DE TANGO の開館式に招かれた——環江さんの右は、タンゴ楽団来日になくてもはならない人だった陰の重要人物、鍛冶敬三さん。

第2部 酒場から生まれたうた

うた：峰 万里恵 ギター：高場 将美

1. タンゴの街 *Barrio de tango*

詞：オメーロ・マンシ *Homero Manzi* 曲：アニーバル・トロイロ *Aníbal Troilo*

●詩人マンシは、アルゼンチン北東部サンティアゴ州の生まれですが、小学校入学以来、少年・青年時代をすべてブエノスアイレスの南の地区ですごしました。当時は都会のはずれ、大草原とミックスした地帯でした。大きな空き地に雨水がたまって沼になり、蛙の音がほんとうにやかましかったという、場末です。現在の駐車場のかわりに、牛囲い場（小牧場）があったわけです。

この曲は、バンドネオン奏者・タンゴ楽団リーダーのトロイロと、緊密な共同制作で、その地区を描いた作品の最初のもので（1942年）。「酒場」と訳したことは *almacén* で、本来の意味は倉庫ですが、酒類や食料品・雑貨を売るカウンターがあり、テーブルでは常連たちがカード・ゲームでひまをつぶしている……といった形態の店です。

街のひとつかけら、あちらポンページャ地区の土手のわきで眠りこんでいる。踏み切りの棒でゆらゆら揺れているランプ、そして 汽車が種まいてゆく「さようなら」の神秘。

月に向かって、犬のほえる声ひとつ。軒先に隠されたあの愛。そして、沼で太鼓を鳴らしている蛙たち。

そして遠くに、あのバンドネオンの声……。

あちらのあの街角では口笛たちのコーラス。酒場いっばいのコディージョ（カード・ゲーム）。もう二度と汽車を見に出てこなかった、近所のあの青白い女性の、ひとつの痛み。

こうしてわたしはおまえの夜々を思いおこす。——タンゴの街。牛囲い場に入ってくる辻馬車たち。そして、ぬかるみをはねかしている月。そして遠くに、あのバンドネオンの声。

タンゴの街。月と神秘。遠い路たち。どうしていることか！ きょう思い出せもしない古い友人たち、どうなってしまったのか！ どこを歩いているのか！

タンゴの街。あの女性はどうなったのか？ フワーナ、わたしがあんなに愛した金髪女。知っているだろうか？——彼女を置いてきたあの日から、彼女のことを思ってわたしが悩んでいることを！

タンゴの街。月と神秘。思い出の中からふたたび、わたしにはおまえが見える！

2. アンダーテ（出て行って） *Andate*

詞：ロバート・フォンティナ *Roberto Fontaina* 曲：ロドールフォ・シアマレッタ *Rodolfo Sciammarella*

●1933年、モンテビデオ（ウルグアイの首都）の劇場ショーで、女性歌手タニアが初演しました。作詞者は、ウルグアイ人で、歌とコメディをミックスした人気ショーの脚本・監督で活躍していました。作曲者（作詞にも協力）は、大衆の心をとらえ、すぐに覚えられるメロディの天才といわれていました。後年ペロン大統領の熱烈な支持者になり、彼が失脚すると国外に脱出、メキシコやスペインに長く住み、そこでもラジオやテレビのCM音楽、各種のリズムの歌謡曲をたくさん作詞作曲し、大ヒットを出しています。

どれほどの年月、わたしはくさを引きずり、あきらめ切って、あなたにないがしろにされるのに耐えてきたことだろう。どれほど多くの夜、わたしは悩みに閉じ込められ、あなたのひどい仕打ちから自由になりたいと望んでいたことだろう。

わたしは心やさしい女、あなたはそれに値しない。わたしはあなたを求める、あなたはわたしを痛みで満たすのに。あなたがわたしに与えた苦しみを、あなたが知ったら、わたしの胸で、自分の愛のなさに泣くことだろう。

あなたに、過去に生きてもらいたい、あの深い愛情の時間を思い出して。あなたは一夜たりとも、キスと愛撫を忘れたことはなかった。そして突然あるとき、運命がわたしの女の夢を倒した。

出て行って！ わたしが苦しむだろうなんて思わないで。わたしの心は、最初の瞬間からこわれている。わたしは泣こうとも思わない。出て行って。そのほうがいい……ノー！ 行かないで、ここにいて！ わたしには、あなたの愛が必要。

3. 場末のメロディ *Melodía de arrabal*

詞：マリオ・バティステッラ *Mario Battistella*

曲：カルロス・ガルデル／エドゥアルド・ボネッシ *Carlos Gardel / Eduardo Bonessi*

●1932年にパリで撮影された歌手ガルデルの主演映画（同名）の主題歌です。著作権登録は彼の名前になっていますが、彼の声楽の先生ボネッシ（パリに来る船中ずっとレッスンをしていた）が作曲してガルデルにプレゼントしたものです、彼は、歌の率直な訴えがつかわるようにメロディをちょっと単純化し、ハーモニーの凝った部分も簡単に直させています。そのほうが、ずっと魅力的な曲になりました。

作詞者はイタリア生まれで、大学はパリ、20代でアルゼンチンに来てレビュー作家などとしていた国際的ボヘミアン。映画制作当時は、パリにいて映画の字幕翻訳などしていました。ガルデルの通訳でした。この曲では、映画の脚本家レペラも作詞者としてクレジットされていますが、名前だけです。

月が銀色に染める街、うすぐらい路地にバンドネオンのつぶやき。花のようにきれいな女の子が、コケティッシュに待っている、しずかな街灯の光の下で。

荒くれものと歌い手たちの生まれ故郷。おまえの壁に、わたしはナイフで愛する名前を刻んだ。キャバレーの女ローサ。金髪のリタ。町娘のリタは最初のデートでわたしに愛をくれた。

街よ……おまえには、センチメンタルなスズメの落ち着かない魂がある。悩み……祈り……やくざな街のすべてが、場末のメロディそのもの。

古い街よ……おまえを思い起こすわたしの眼から、涙の大きな粒がこぼれたら許しておくれ。涙はおまえの石だたみにころがるとき、長くつづくキスとなり、おまえにわたしの心を与える。



● 映画『場末のメロディ』のカルロス・ガルデル（右）とインペリオ・アルヘンティエーナ（アルゼンチン生まれ、スペインなどヨーロッパで活動）

4. セミのように *Como la cigarra*

詞&曲：マリーア・エレナ・ワルシュ *María Elena Walsh*

●作者は大学生の年代のころは、歌とギター的女性デュエットを組んで、ヨーロッパで、アルゼンチンのフォルクローレやスペイン民謡をうたう、文化普及活動をしていました。帰国してからは、子どものための劇作・作詞作曲で大人気になり、TVシリーズ番組は歴史的な成功をおさめています。その後、都会人の精神の悩みを反映した、新しいフォルクローレを創作。この曲をつくった1970年代の末に作詞作曲をやめ、他の執筆活動に入りました。

あれほど何度も、わたしは殺され、あれほど何度もわたしは死んだ。それにもかかわらず、わたしはここにいる、よみがえりながら。

わたしは不運に、ありがとうを言う。そしてナイフを持った手に。なぜなら、わたしを殺すのが、あんなに下手だったから。そしてわたしは、うたいつづけたから。

あれほど何度も、わたしは消された。あれほど何度もわたしは身を隠した。そしてわたしは自分自身の埋葬に行った。ただひとり、泣きながら。

わたしは忘れないようにハンカチに結び目をひとつつくった。でもあとで、そのことも忘れてしまった。それはただ1度だけではなかった。そしてわたしはうたいつづけた。

あれほど何度も、あなたは殺された。それだけ何度も、あなたはよみがえるだろう。どれほど多くの夜をあなたは過ごすことだろう、絶望しながら。

そして難船の時に、暗闇の時に、だれかがあなたをよみがえらせるだろう、うたって進んでいくために。

うたってきた、太陽に向かって、せみのように土の下に1年いたあとで。戦争から帰ってくる、生き残った者とおなじに。

5. ラ・プルペーラ・デ・サントルシーア

La pulpera de Santa Lucía <vals criollo>

詞：エクトル・P・ブロンベールグ Héctor Pedro Blomberg 曲：エンリーケ・マシエール Enrique Maciel



●サントルシーア教会区は、ブエノスアイレスの南部、現在のバラークス地区、リアチュエロ川のほとりです（『タンゴの街』のすぐ先のあたり）。19世紀の初めには、そこに黒人女性が「プルペリーア」（左を参照）を開いており、16才くらいの金髪娘が働いていて評判でした。政治家が民兵をひきいて戦っていた時代、独裁者ローサス將軍のマソルカ結社が街を支配する中で、反抗軍だったラバージェ將軍に組する兵士が、恋人の彼女を連れてウルグワイに逃れたというエピソードがありました。この話を老人から聞いた、ジャーナリスト・詩人・小説家でもあるブロンベールグが、人気歌手イグナーシオ・コルシーニにうたってもらうために歌詞を書き、彼の伴奏ギタリスト、マシエールがワルツのリズムで作曲しました。1929年のスーパー級ヒット曲です。

プルペーラ

プルペリーアで働く女性。

プルペリーア

昔、いなかの町や村にあった、ワイン・酒類や塩、穀物、ロウソクその他日用品を売る店。立ち飲みもでき、ひまつぶしの場所でもあった。

パジャドール

ギターをひきながら即興でうたい語る吟遊詩人。パンパ大草原（ブエノスアイレスもその一部）の伝統となっていた。

金髪だった。そして彼女の空色の目は、朝の大空の色を映していた。そしてうたっていた、ひばりのように——サントルシーアのプルペーラ。古い教会区の花だった。彼女を愛さないガウチョがいたろうか！4つの兵營の兵士たちが、プルペリーアに来てため息をついていた。

彼女に歌ったのは、マソルカ結社のパジャドール。ギターの甘い嘆きとともに、ジャスミンに香る格子窓で、ディアメーラ（アラビア・ジャスミン）に香る中庭で。「魂できみを愛す、プルペーラ。そしていつの日か、きみはわたしのものにならなければいけない。町の夜々が、サントルシーアのギターたちでいっぱいになっているあいだ」

ラバージェ党のパジャドールが彼女を連れて行った、1840年が終わろうとしていたとき。もう彼女の青い両目は、サントルシーアの教区を照らさない。

ローサスの軍勢は、ビダーラやシエーロをうたいに帰ってはこなかった。プルペリーアの格子窓では、ジャスミンたちが嫉妬で泣いていた。

そしてマソルカ結社のパジャドールは、空っぽの中庭でうたいに帰ってきた。痛ましい 最期の時のセレナータ。それを川の風が運んでいってしまった。

「どこへ行った？ きみの青い目といっしょに、おお、わたしのものではなかったプルペーラ、どんなに、きみゆえにギターたちが泣いていることだろう！ サントルシーアのギターたちが！

6. 貧しいことは不幸ではない *Não é desgraça ser pobre*

詞：ノルバールト・ド・アラウージョ Norberto de Araújo 曲：ジョゼ・J・カヴァリエイロ《ファド・メノール・ド・ポルト》 José Joaquim Cavalheiro "Fado menor do Porto"

●作詞者はジャーナリストで、リスボンの民衆の文化伝統を守り育てることに功績がありました。1940年代に（たぶんブラジルのリオのカーニヴァルにヒントを得て）リスボンの祭日に、各町内がパレード・ダンスを競うイベントを創始し、これは今日までつづいています。

伝統的なファドでは、歌い手はまず歌詞を選び、次に、それに合った既成のメロディを選びます。この歌詞には、女性歌手アマリア・ロドリゲシュさんが、マイナー（短調）とイベリア旋法のミックスした、《ファド・メノール・ド・ポルト》と呼ばれるスタイルを選びました。

貧しいことは不幸ではない。頭がおかしいことは不幸ではない。不幸なのはファドをもってきていること——心のなかに、口のなかに。

銅の小さなコインでも、銀のよりも価値がある。貧しさにわたしたちが殺されないなら、貧しいことは不幸ではない。

この切れ切れに乱れた人生では、幸福であるのはたいたことではない。頭のおかしい女は何も感じないのだから、頭がおかしいことは不幸ではない。

生まれるときわたしは、星をひとつもって来た。そのなかに運命が刻みこまれていた。それをもって来たのは不幸ではない。不幸はファドをもって来たこと。

不幸は、みんなが歌いすぎて、もう声もかれて歩きまわること。そしてファドは、かたくなに、大胆に。心のなかに、口のなかに。

7. 石と道 *Piedra y camino* <zamba>

詞&曲: アタウワルパ・ユパンキ *Atahualpa Yupanqui*

●アルゼンチンのフォルクローレで、いちばん広く愛されている舞踊は《サンバ》で、スペイン音楽が南アメリカで土着化したものです。この曲は、全ラテンアメリカのフォルクローレの最高峰である歌手・ギタリスト・詩人・文筆家ユパンキの比較的若いころの作品。伝統的なサンバのスタイル（リズムと曲構成）を守った創作歌曲です。

山からわたしは下りてきた——道と石。
わたしは、魂にからみつかれて、持ち歩いている
(わたしの命のひとよ) ひとつの悲しみを。

わたしがあなたを愛しないと、あなたはわたしを責める。それは言わないでください。たぶんあなたには決してわからないかも (わたしの命のひとよ) なぜわ

たしが遠ざかってゆくのか。

わたしが幸せを捜し求めれば求めるほど、わたしは悩みながら生きる。そして、そこにとどまらなければいけないときに (わたしの命のひとよ) わたしは歩き去ってゆく。

ときには わたしは川のように。うたいながらやってくる。そして、だれにも気づかれないように (わたしの命のひとよ) わたしは泣きながら去ってゆく。

それがわたしの運命——石と道。

遠い、美しい夢をめざしてさすらう (わたしの命のひとよ) わたしは巡礼者。

8. わが街のカーニバル *Carnaval de mi barrio*

詞&曲: ルイス・ルビステイン *Luis Rubistein*

●作者は、日露戦争の時代に圧迫を逃れて、ウクライナから逃げてきたユダヤ人の二世（ブエノスアイレス生まれ）です。両親は音楽とは無縁でしたが、兄弟5人がすべて、タンゴやポピュラー音楽関係で活動しました。ルイスはいちばん有名な存在で、楽譜出版社、ブエノスアイレス唯一のプロ歌手養成学校経営・教授など、かなりの大物でした。この曲は1938年のヒットで、初演者は女性歌手メルセデス・シモーネだそうです。

わたしの街はお祭りだ、いちばんいい笑顔を見せて。そして、とある不思議なやさしさが、わたしの心にしみこんでくる。

まるで時間が、いつもより急いで走っていくようだ。そしてまた、いつもと同じ泥から、ひとつの歌が芽生えたようだ。

いたずら坊主たちのお祭りグループが、音痴にタンゴをうたいながら、人々の耳を痛めつける、調子のくるった声で……

わたしの街のすずめたち。彼らはぬかるみにまき散

らす、喜びを手につかんで。それは神様から贈られたもの。

転落の人生から、帰ってきた女は、アパッシュ（パリのあばずれ女）の仮装をした。街の、どの戸口でも、とめどなくうわさ話になっている。

彼女のとんでもない衣装、彼女の黒い珠のような両目、そして彼女の恥知らずさ、それを彼女は隠すことも知らない。

八百屋のおじいさんは、歩道に寝そべて、パイプを噛んでいる、働くのに疲れて。そして彼のにがれい笑顔には、ひとつのノスタルジーがからまっている。彼もまた、あのイタリアでは、彼のカーニバルを生きたのだ。

わたしの街のカーニバル、そこではすべてが愛。笑い声の鈴たちが、痛みをかえって大きくする……

わたしの街のカーニバル、それは太陽の小さなかけら。月のノスタルジーと、街灯の歌をもって。

9. ラグリマ（涙） *Lágrima*

詞: アマーリア・ロドリゲシュ *Amália Rodrigues*

曲: カルロシュ・ゴンサウヴシュ *Carlos Gonçalves*

●きょう2つめのポルトガルの歌です。

《ファド》というジャンルを超えて巨大なアーティストである女性アマーリア・ロドリゲシュさんが、病床で書いた詩に、彼女のギターラ（ポルトガル・ギター）奏者カルロシュ・ゴンサウヴシュが作曲しました。

悩みでいっぱいになって、悩みでいっぱい、わたしは横たわる。そして、もっとふえた悩みとともに起き上がる。

わたしの胸に、もう居ついてしまったこんなやりかた、あなたがこれほど好きだということがすべてに表れる、こんなやりかた。

絶望——わたしの絶望ゆえに、わたしの中で、わたしは刑罰を受けている。あなたがきらい——わたしは、あなたがきらいと言っている。そして夜は、あなたのことを夢を見る。

いつの日かわたしは、死んでゆくのだということを思うとき、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わ

たしは地面にショールを広げる。そしてそのまま、まどろんでいこう。

もしもわたしにわかったら——死ぬことによってあなたが、わたしのことを泣いてくれるとわかったら、ひとしずくの涙——あなたのひとしずくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てるだろう。

10. パ・トド・エル・アニヨ (これから1年分すべて) *Pa' todo el año*

詞&曲: ホセ・アルフレード・ヒメーネス José Alfredo Jiménez

●カンシオン・ランチェーラは、メキシコの農牧地帯の文化・感情から生まれた歌謡曲ジャンルです。この曲の作者は、その最高峰(自身でもうたった)です。

男女の別れ・酒場・テキーラといったキーワードが出てくる曲はかなり多いです。タンゴと似ているといえは似たところもありますが、酒量が圧倒的に多いのが、さすがメキシコ!?

あなたの愛のために——こんなに望んでいて……なくしたことがこんなに寂しい、あなたの愛のために——わたしにもう1杯、そしてそれからもっとたくさん注いでください。わたしに、これからの1年分ぜんぶ注いでください。わたしは真剣に酔っぱらおうと思っている。

わたしがうんと酔っているのを見た人が話したら、誇りをもってその人たちに教えてあげなさい、それはあなたゆえなのだ。わたしはそれを否定しないぐらいの勇氣は持っているから。

わたしは叫ぼう、あなたの愛ゆえに、わたしは自分を殺している。人々は知るだろう、あなたのキスゆえにわたしは敗れたのだと。

今日からこの先ずっと、もうわたしには愛は興味ない。わたしは世界中でうたおう、わたしの痛みとわたしの悲しみを。

わたしはこの打撃からもう起き上がれないと、知っているのだから。そして、たとえわたしが望まなくても、わたしは愛で死んでゆくだろうから。



● ホセ・アルフレード・ヒメーネス
すべて自分の人生体験にもとづいて作詞作曲しました。

ごいっしょに時間をすごしていただきありがとうございました。
またお会いするのを楽しみにしております。
今後どうぞよろしく。

企画・選曲: 峰 万里恵
プログラム作成: 高場 将美

● 峰 万里恵ホームページ <http://mariemine.web.fc2.com/>